

小規模多機能型居宅介護における看取りの経過

—援助者の視点から—

○吉田恭子 福岡県立大学 008272

小規模多機能型居宅介護、看取り、複線径路・等至性モデル

研究目的

・小規模多機能型居宅介護にて看取りに至った経過を明らかにし、看取りケアを強化促進する支援を検討すること。

研究の視点および方法

- ・小規模多機能型居宅介護は、利用者の状態に合わせて通い・訪問・泊まりを柔軟に組み合わせることが可能である。
- ・終末期に入院加療を望まない場合には、小規模多機能型居宅介護を活用すれば、利用者が望む場所でその人らしい生活を継続できる⇒入院or入所or自宅のような三誌択一をしなくても済む(高橋, 2012)。看護職員が必置であることから例えば認知症高齢者グループホームに比べて医療依存度が高い利用者のケアも可能ではないかと考えられる。
- ・しかし小規模多機能型居宅介護の開設数の推移は2008年1557(厚労省, 2008)、2010年2367(厚労省, 2010)、2017年4915(厚労省, 2017)か所と少ない。

・先行研究は次のようなものがある。経営上の課題検討や拠点機能の有効性の現状調査(野田・糟谷, 2011)、病名や介護度などとの関係(永田・松本, 2010)、介護保険対象外の自主事業を含む小規模多機能ケアにおける日常的な看護職と介護職の役割(牧野, 2010)についての調査があるが、終末期を担う従事者の感情変化に関する研究はなかった。

・小規模多機能型居宅介護のうち看取りの経験がある事業所のセミナー発表資料から抽出する。

・上記の代表者に電話にて研究の趣旨等を説明し、協力が得られた事業所の従事者を対象に半構造化面接を実施する。

・面接後、逐語録から事例に再構成し、利用者の病状や家族の意向の変化に伴う従事者の感情の変化に関する語彙を抽出する。

・複線径路・等至性モデルを用いて分析する(安田, 2015)。複線径路・等至性モデルとは、時間を捨象せず個人の変容を社会との関係で、等至点、分岐点、通過点の概念を用いて現象や経験をとらえるようとする文化心理学の方法論である。

倫理的配慮

・看取りの経験がある事業所の代表者から従事者を推薦していた際に強制力が生じないように依頼する。また、面接時は発言が他の従事者に分からないように個室で行う。もしも、面接中に事業所や関係機関、利用者名などが語られたとしても、逐語録にする際に特定されないように記号化することを約束し、同意書を交わした。なお、所属機関の研究倫理委員会にて承認を得て実施した。

研究結果

・8か所の事業所の従事者から協力を得て整理した事例は18あり、高齢でがん末期が多かった。(表1)

・看取りへの否定的な感情は利用者や家族の人となりや意向を知り、事業所内の助けがあるなかで変容した。(図1)

考察

・死に逝く人に向き合うこと、同時に家族へのケアを行うことは容易ではなく、経験の少ない従事者にとっては苦痛を伴うことだろう。事業所内での助け合いの他に、かかりつけ医や訪問看護との連携により外部との協力体制を整えることは従事者の心の安寧となり、丁寧なケアにつながると考えられる。それらにより家族や同僚などからの正のフィードバックは自己肯定感へと発展する可能性が示されたと考えられる。

表1 小規模多機能型居宅介護の従事者が経験した事例

事例番号	事例内容	年齢	性別
1	胃腸と輸液を拒否した90歳後半、女性の事例	90歳後半	女性
2	最期の最後に自宅に戻った事例	90歳代	女性
3	余命半年と宣告されたが1年後に入院して死亡した事例	80歳代	女性
4	皮膚がんだった利用者の事例	90歳後半	女性
5	胃腸造設を希望したができなかった事例	80歳代	女性
6	特殊な治療を選択した事例	80歳後半	女性
7	腎不全増悪のために医師が不在時に死亡すると推測された事例	90歳代	男性
8	呼吸停止に陥って家族が救急隊を要請してしまった事例	90歳代	男性
9	無年金の生活保護家庭の利用者の事例	70歳後半	女性
10	家族間の調整をした事例	90歳代	男性
11	呼吸停止に陥って職員が救急隊を要請してしまった事例	90歳代	男性
12	看護師の家族が医療との調整を行ってくれた事例	80歳代	女性
13	3年にわたり支援した事例	90歳代	女性
14	亡くなった日まで通いを利用した事例	80歳代	女性
15	疎遠になっていた子どもとの関係を最後に取り戻した事例	70歳代	男性
16	看取り以外にもさまざまな調整をした事例	70歳代	女性
17	主介護者以外の家族から苦情があった事例	80歳代	女性
18	ずい臓がんで看取りの時期に入ったばかりの事例	70歳代	女性

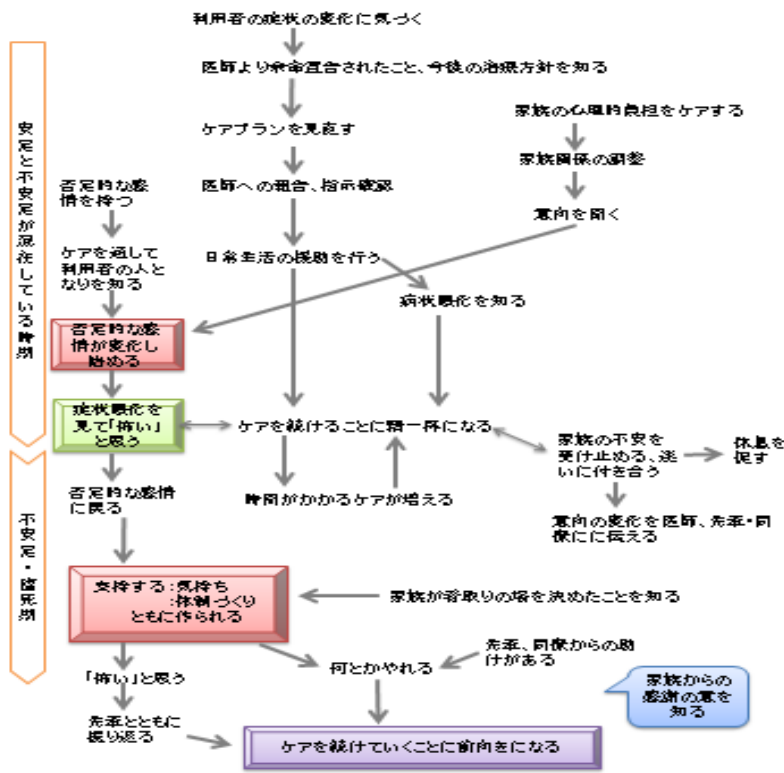


図1 利用者や家族、関係職種とのかかわりによる従事者の感情の変容

引用文献

厚生労働省(2008)、平成20年介護サービス施設・事業所調査結果の概況。
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service08/dl/sisetu-jigyosyo.pdf>

厚生労働省(2010)、平成22年介護サービス施設・事業所調査結果の概況。
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service10/dl/sankou.pdf>

厚生労働省(2017)、平成29年介護サービス施設・事業所調査結果の概況。
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service17/dl/tyosa.pdf>

牧野由香(2010)「小規模多機能ケアにおける看護職と介護職の役割」『日本看護福祉学会誌』15(2)、81-97。

永田千鶴、松本佳代(2010)「エイジング・イン・プレイスを果たす小規模多機能型居宅介護の現状と課題」『熊本大学医学部保健学科紀要』6、43-62。

野田毅・糟谷昌志(2011)、小規模多機能型居宅介護の有効性に関する研究—全国における事業所の現状調査、厚生指針、58(2)、1-5。

高橋誠一編(2012)、小規模多機能型居宅介護開設と運営の手引き、簡井書房、25-27。

安田裕子(2015)、TEMの基本と展開、TEM理論編 複線径路・等至性アプローチの基礎を学ぶ、新曜社、10-45。